



撮影：山田新治郎(表紙、並びに当ページ)

国立代々木競技場

東京都渋谷区

丹下健三設計の国立代々木競技場がなかったら、建築家の隈研吾もいなかっただろう。少年・隈研吾に建築家の夢をもたらしたのが同競技場だった。ここは一九六四年の東京オリンピックで水泳競技施設などとして使用され、世界で初めて鉄骨を本格的構造材に使うなど、構造とデザインがハイレベルで融合した建築だ。隈研吾は「出会い」をこう話す。

「一九六四年、小学四年生の秋、父親に連れられて代々木競技場を訪れた日のことは、忘れることができない。当時の東京は『低い』都市であった。渋谷から競技場までの道のりも、木造の低い建築で埋め尽くされていた。そのなかからよつきと光の針が突き出して、青空を指していた。圧倒され、あこがれた。丹下は鋭い線で、大地と天を結びたかったのではないかと思う。それはまさに鉄とコンクリートで作られた稲妻だった。ケーブルを吊るための二本のコンクリートのポストも、線としてデザインされているし、下手をするとのっぺりとしてしまう金属屋根は、線の集合体としてデザインされている。

室内に入ってもこの線の印象は強烈で、トップライトからの光は、天井材を支える線の方向に沿って、プールの水面へと落下し、リバウンドして、また天へと送り返されていく。

第二体育館のほうを向くと、線への意図は更に明白であった。二本ではなく、一本のポストで支えられているからである。内部では、細い線が絡みあい、渦を形成しながら、天と大地を結んでいる。その渦に圧倒され、飲み込まれた結果が、今の自分であるように思える(隈研吾)

出会いや縁がどのように作用するかは人によって違う。隈研吾はその光景を切り取って脳裏に刻み込んでいた。天と大地を結ぶ鋭い線への憧憬。自身の出会いをそう分析する隈の視線は鮮やかである。



当時、世界的に類のない大スパン吊り屋根構造を採用。第一体育館はコンクリートの主柱、メインケーブル、鉄骨の吊り材、押さえケーブル、屋根鉄板などで構成される。メインケーブルは主柱を通してアンカレッジに固定される吊り橋の構造を応用している。吊り材をケーブルではなく鉄骨にしたのは、金属屋根の曲線を美しく見せるためである。第二体育館も構造の基本は同じだ。